

書評

チャールズ・アプトン著『ドゥーギン対ドゥーギン』

ジェイソン・モーガン（麗澤大学准教授）

本稿は、Charles Upton, *Dugin against Dugin: A Traditionalist Critique of the Fourth Political Theory* (Reviviscimus, 2018), ISBN 978-1-59731-219-6、の書評である。

2017年9月28日の『産経新聞』のコラム欄に、以下のような記述が見える。

「プーチン政権やロシア軍に影響があるとされる「極右」哲学者アレクサンドル・ドゥーギンの「第四の政治理論の構築にむけて」。第四というのは、現代世界の支配的イデオロギーであるリベラリズムを「第一」、それに対抗しようとして敗れたコミュニズムとファシズムをそれぞれ「第二」「第三」と位置づけ、これら3つを超える政治思想を打ち立てようとする試みだからだ。

ハイデッガーやポストモダン思想を援用しつつ、レイシズム（人種主義）を除去した上でファシズムを再活用しようとするドゥーギンの模索は刺激的で、危険な魅惑に満ちている。この論文で「第四の政治理論」の明確な姿が示されるわけではないのだが、訳者の乗松亨平が「解題」で指摘するように、「ポストモダンにおけるリベラルの行き詰まりを打破しようとする、ひとつの（野蛮なほどに）力強いかたち」として、そのパワフルな文体とも相まって怪しい魅力を放つ。」（文化部・磨井慎吾「『第四の政治理論』の危険な魅惑」<https://www.sankei.com/article/20170928-F6QPF7PIQVIHFJASZ3DWIPE4NI/2/>）

以上の記述にもある通り、アレクサンドル・ドゥーギンは「怪しい魅了を放つ」思想家である。プーチン大統領に強い影響を与えている思想家だから、ドゥーギンの本などをもっと理解したいと思う人は多いが、その「怪しい魅力」に魅かれる読者が数多くいて、とりわけアメリカでは、ドゥーギンが言っていることをきちんと理解していない保守が大勢いる。その結果、ドゥーギンが唱えるリベラル主義に対する批判に賛成して、ドゥーギンの思想を絶賛する。しかし、ドゥーギンが本当に言っているのは、リベラル主義に対する批判だけではない。実は、ドゥーギンが主張している理論は、それよりも非常に複雑で、極めて危険なところも多く存在する。ドゥーギンの思想を案内してくれる批評家が必要だ。

そこで、チャールズ・アプトン著『ドゥーギン対ドゥーギン』がお薦めだ。アプトンは、評者の知る限り、ドゥーギンという地政学・政治学者の書籍に関する、最も詳細で鋭い批評家である。『ドゥーギン対ドゥーギン』は、お薦めの一冊だ。

アプトンは決して高名な学者ではない。彼は高卒で、波瀾万丈の人生を送ってきた人物である。しかしドゥーギンの思想を批評、批判する人としては、アプトンが最も適切かもしれない。なぜなら、ドゥーギンが取り上げているいくつかのテーマやアイディアについて、アプトンほど優れている専門家はいないと思われるからだ。今のアメリカの大学では、アプトンという学者の居場所はない。アプトンは伝統的な考え方を持っているので、

ジェンダー・イデオロギー、共産主義、社会主義など、左翼が常に推しているプロパガンダを一掃する。しかし大学のオーソドクシーに束縛されていないアプトンだからこそ、ドゥーギンが「放」っている「怪しい魅力」を徹底的に批判して、ドゥーギンの危険さを見事に掴んで見せてくれる。正直なところ、高卒という低い学歴しか有さないアプトンは、今のアメリカの大学の「学者」とは雲泥の相違であり、アプトンの専門性こそが『ドゥーギン対ドゥーギン』の「魅力」になっている。

アプトンは1960年代、アメリカで有名だった「ビート・ジェネレーション」の詩人として活躍を始めた人物だ。いわゆるヒッピー時代にも「カウンターカルチャー」に深く携わったが、少しずつ「伝統」に目覚めて、ルネ・ゲノン(René Guénon (1886-1951))、ユリウス・エヴォラ(Julius Evola (1898-1974))、ラマ・クーマラスアミー(Rama Coomaraswamy (1926-2006))、中国の古典である「易経」、フリットヨフ・シュオン(Frithjof Schuon (1907-1998))、プラーナ文献などの影響を受けて、形而上学を中心に学者の道を歩むようになった。カトリックからスーフィーイスラム(イスラム神秘主義者)に改宗したアプトンは、全世界の「伝統的な形而上学」を専門にしている。ほとんど独学だ。

そのアプトンから見ると、ドゥーギンは「伝統的な形而上学」をよく持ち出すが、ドゥーギンの当該分野についての理解は浅すぎる。浅すぎるというよりも、アプトンの考えでは、ドゥーギンは、わざと伝統的な形而上学を歪曲している可能性がある、と『ドゥーギン対ドゥーギン』で指摘する。伝統的な形而上学を歪曲しているその目的はおそらく、プーチン大統領をはじめロシアの極右体制が望んでいる、西側との真剣勝負を正当化するためではないか、とアプトンは疑問を呈する。つまり、ドゥーギンは詐欺師だという疑惑を否定できないわけだ。恐らくこのようなところに、ドゥーギンの「怪しい魅力」を説明してくれる鍵があるのではないかと評者は思う。

『ドゥーギン対ドゥーギン』は、非常に複雑な一冊だ。アプトンが身に付けている伝統的な形而上学の知識に溢れている。解りやすくきれいな英語で書かれている本だが、アイディアの幅広さが顕著に表れていて、この本を簡単にまとめて紹介するのは無理がある。

だが、アプトンが主張する最も重要なポイントは、恐らくマンヴァンタラ(manvantara)であろう。マンヴァンタラはヒンズー哲学で、時間が循環するという概念を意味する。

そのヒンズー哲学によると、現在がカリ・ユガ(kali yuga)、つまり最も堕落した、循環の中で最後の時代だ。(アプトンは指摘していないが、仏教で言えば「末法」に当たる時代だろう。)アプトンはこのカリ・ユガと言う解釈に賛成だ。つまり、アプトンの考え、そしてヒンズー哲学の考えで言うと、世界が非常に混乱しているのは、地政学・政治学などを遥かに超えた次元の動きの副産物である。宇宙レベルでは、今の形而上的時間の循環が終わろうとしているため、全世界がカオスに陥っているわけだ。これがアプトンの考えの背景にある、とても重要な大前提だ。

しかし、この点にドゥーギンの詐欺性が露見しているのではないかとアプトンは懐疑的に捉えている。ドゥーギンはこのようなヒンズー哲学、伝統的形而上学思想などを頻繁に取り上げるのに、そのことを理解していないようだ、とアプトンは問題提起する。なぜなら、ドゥーギンの考えでは、今のカリ・ユガ、つまり世界の終焉を止めて、黄金時代を取り戻すことが可能だと考えているからだ。そしてもっと驚くべき事に、その時間の循

環の回転の逆戻りは誰が実現するかというと、ドゥーギンが思うに、ロシアに他ならないのだ。

ドゥーギンは、彼が今まで展開してきた三つの政治理論（即ち自由主義、共産主義、ファシズム）を超越する、いわゆる「第四の政治理論」を活かして、腐敗した自由主義圏、つまり西側（ドゥーギンは西洋の太古の神話に出てくる「アトランティス」という、海に沈んだと言われる大陸の名前で呼んでいる）を潰して絶滅させたいと言っている。要するに、ドゥーギンの考えでは、彼が発明した政治の理論が形而上学に勝てると考えている。ドゥーギンの考えでは、ロシアがある意味、神様から聖なる使命を委託されたのだ。それは何かというと、アメリカが代表する腐敗した西側を過去のことにするという使命だ。それが可能なら、世の終わりも避けられて、時間の循環を逆回りに切り替えて、黄金の時代が現実になると期待しているようだ。

ドゥーギンは、一人の哲学者、政治学者に過ぎない。そして、ロシアのプーチン大統領と彼を囲む顧問らは、どこまで本気でドゥーギンの思想に賛同しているのか勿論、心の内部の問題だから何とも言えない。しかしプーチン大統領の言動を分析すると、彼はかなりドゥーギンの言う通りに、行動したり発言したりしている。例えば、2022年6月の演説の中で、プーチン大統領は「冷戦が終わったらアメリカは神様の地上の使いとして振る舞っているが、世界の秩序が大きく変わっていることに気がついていないようだ」と発言した。（<https://www.republicworld.com/world-news/rest-of-the-world-news/russias-putin-says-us-regards-itself-messenger-of-god-on-earth-articleshow.html>）

そしてウクライナへの侵略も、他のロシアの極右と同様、ドゥーギンが以前から促していた事だ。ドゥーギンの立場から見ると、今のウクライナへの侵略はウクライナの「解放」のためで、西側の絶滅の一環として必要な行動である。プーチンはほぼ同じ理解の持ち主であると思われる。

一方、アプトンの分析によると、こういった言動は矛盾しすぎていて、結局失敗に終わる。なぜなら、ドゥーギンの思想実態が矛盾だらけからだ、とアプトンは書いている。『ドゥーギン対ドゥーギン』というタイトルは、ドゥーギンが地政学・政治学と形而上学と、それぞれの本質を対立させていることを指す。ドゥーギンの考えでは、政治が形而上学の方向性を変えられると信じているようだが、アプトンが反論するのは、ドゥーギンは政治学、地政学をよく理解しているものの、形而上学を歪曲して、自分が達成したい政治的目標のために利用することはルール違反で、学者失格だという厳しい批判なのだ。ドゥーギンは結局、学者ではなくてグローバリストだという批判が、アプトンの結論だろう。彼（ドゥーギン）が望んでいるのは、ロシア、またはロシアと中国が協力する「ユーラシア」が支配する、世界の新秩序に過ぎない。そう評者は考えるので、この点はアプトンの解釈に評者も基本的に賛同する。アプトンはロシアを批判するためにこの本を書かなかつたし、どちらかというとアプトンは、ロシアよりもワシントンDCに対して警戒心を持っている。（評者もそうだ。）『ドゥーギン対ドゥーギン』は2018年に刊行されているので、2022年のウクライナ侵略については、当然アプトンは本書の中で言及していない。アプトンが言いたいのは、ドゥーギンが提唱している偽りの形而上学では、政治の現状、そして伝統的な思想など理解できるはずがない、ということだ。ドゥーギンは、出鱈目に伝統的な思想を利用する人物として、今の地政学状態を攪乱したり混乱させたりする人物と

して、要注意だというのがアプトンの主張だ。

『ドゥーギン対ドゥーギン』は、簡単に理解できる本ではない。哲学、形而上学、歴史、現在の政治など、アプトンが持っている知識は深くて広い。アプトンは、学者の中の学者で、とても慎重に論理を展開する人だ。その思想を理解するには、英語のネイティブでも苦労させられる。しかしだからこそ、本書は必読の一冊だと思う。現在の最も重要問題の一つ、つまりロシアの再台頭とその地政学的結果をもっと本質的に理解するために、形而上学の専門家であるチャールズ・アプトンが展開する、ロシア指導層の中心人物の思想の批評を是非読んで、世界を多面的に、多次元的に理解されたい。

(追記)

本誌の編集中(8月20日)、ドゥーギンの娘であるダリヤ・ドゥーギナ氏がモスクワ周辺で、車の爆弾によって殺害されたというショッキングな消息が報道された。爆弾魔のターゲットは、娘ではなくてドゥーギン本人だったと思われる。

いずれにせよ、ドゥーギン(またはその娘)を狙った人物、組織などはまだ不明。殺害事件を受けてプーチン大統領は8月22日、ドゥーギン夫妻に弔電を送り、ロシア連邦保安局(FSB)も同日、「ウクライナの特殊部隊による犯行だ」と声明を出したが、ウクライナ側はこれを否定しており、詳細は不明である(8月24日記)。